ID 0020341

ゆくはし
今昔物語

2024 年、市制 70 周年を迎える行橋市。山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきました。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.10　行橋と渇水問題

行橋市は日本の気候区分では瀬戸内海式気候帯に位置し、降雨量が比較的少ないとされます。また市域を流れる河川は、英彦山や平尾台を源流とし、長さが短く傾斜が急であるため、雨が降ってもすぐに海に流れていくことから、この地域は昔より干害に悩まされてきました。市内に多くのため池があるのは、生活の礎であった農業用水の確保のためで、その大半は江戸時代頃に築かれたものです。
行橋が上水道事業への本格的な取り組みを開始したのは、市制施行前の昭和 26 年（1951）のこと。翌年、当時の行橋町が現在の大橋一丁目で浄水場建設に起工、昭和 28 年 5 月に「行橋浄水場」が完成し、町内で給水を開始しました。

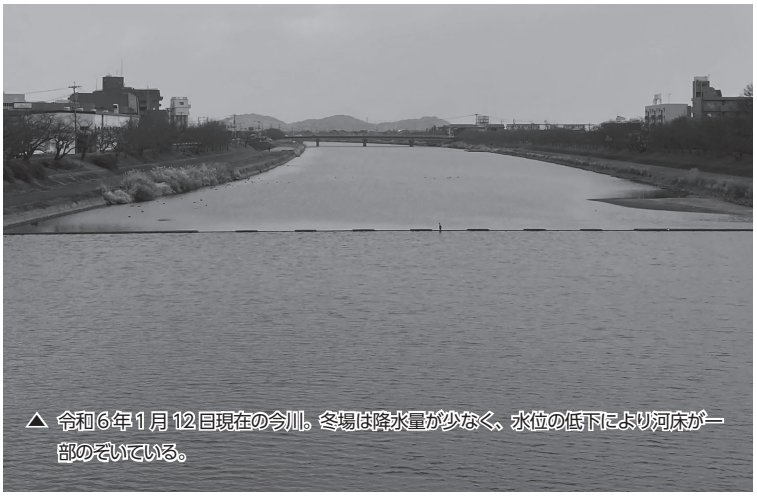
1958 年 / 昭和 33 年
干上がった今川の河床

昭和 33 年（1958）からは 3 年連続の干ばつにより夏場は給水制限。この未曽有の大干害により、矢留の裏ノ谷池を貯水池として利用するため、新たに浄水場の建設に着手、昭和 36 年に「矢留浄水場」が完成し、給水能力は 2 倍になりました。また昭和 45 年（1970）には入覚に市内最大の農業用水池「御清水池（おしょうずいけ）」が完成します。

▲ 豊国橋から下流（蓑島方面）を写したもの。昭和 33 年は 6 月 17 日から 8 月 1 日までの 45 日間全く雨が降らず、今川が干上がった。左奥の建物は当時の行橋市庁舎（現在の行橋市役所西棟）。

2024 年 / 令和 6 年
現在の今川の流れ

治水、灌漑、利水を目的とし、昭和 46 年に今川上流の添田町津野に「油木ダム」、およそ半世紀後の平成 30 年（2018）には、祓川中～上流域のみやこ町伊良原地区に「伊良原ダム」が国、県の事業で完成します。その中でも行橋市の上水道は、8 割余りを油木ダムに依存しており、文字通り「行橋の水がめ」といえます。
しかしながら、行橋市はここ最近の 10 年間でも、水不足により 4 度渇水対策本部が設置されており、渇水問題は市政喫緊の課題といえるでしょう。



▲ 令和 6 年 1 月 12 日現在の今川。冬場は降水量が少なく、水位の低下により河床が一部のぞいている。

普段なにげなく使っている、水。あって当たり前のように思いがちですが、水は限りある資源です。「歯磨きをする時はコップを使う」、「お風呂の残り湯を洗濯や掃除に使う」など日常生活を見直し、皆さんも「節水」を心がけるようにしましょう。